

飛騨地方国語教材開発史の一動向

高山（市立）西小学校の場合

安直哉

一 研究の対象

高山西小学校研究部では、昭和八年に、当時の校長、高木清太夫のもとで、飛騨地方の伝説および民謡を収集し一冊の本（非売品）として発表している。その書名は『飛騨の伝説と民謡』（以下、昭和八年版と呼ぶ。）である。

高山西小学校は、その後、昭和十一年の市制施行によって高山市立西小学校になり、昭和十六年には高山市立西国民学校に改称された。戦後の昭和二十二年に再び高山市立西小学校と改称され、現在の同校へ至っている。

昭和二十九年に同書は改訂され、装いも新たに『飛騨の伝説』（以下、昭和二十九年版と呼ぶ。）として刊行された。その経緯について昭和二十九年版の「序」には次のように書かれている。

「本書の初版は、高木清太夫校長当時の在職職員が、代情通三氏の御協力を得て刊行されたものであったが、二十余年後の今日では当時のものは全くその影もなく、各方面よりの再発刊の要望もあり飛騨の平易な読物として親しまれ、郷土の理解と紹介の一助となるならば、先輩諸氏の意志にも副つものと考え、茲に改訂増補し、再版を決定したものである。」（一頁）

昭和二十九年版は高山市立西小学校研究部の編集である。昭和八年版も昭和二十九年版も、いずれも小学校が編集した点に意義がある。小学校が編集をしたということは、読書教材であれ、読み聞かせの教材であれ、い

ずれにせよ学校教育の教材となりえるような意図のもとで編纂されたものと考えられる。両書は、飛騨地方の小学校教育を研究するうえで貴重な資料と言えるのである。

二 伝説の国語教材性

伝説と昔話の違いについて、柳田國男は比喻を用いて次のように分かりやすく説明している。

「伝説と昔話とはどう違ふか。それに答へるならば、昔話は動物の如く、伝説は植物のやうなものであります。昔話は方々を飛びあるくから、どこに行つても同じ姿を見かけることが出来ますが、伝説はある一つの土地に根を生やしてゐて、さうして常に成長して行くのであります。」（一頁）

飛騨の伝説は、飛騨の土地に根づいて成長してきた。ただし、もちろん伝説は必ずしも史実ではない。史実ではない伝説から我々は何を学ぶのか。その答えは様々であるが、一つ重要なことは、飛騨という風土で生きてきた人々の心性を感じ取るのに格好の教材であるという点があげられる。

ところで、伝説を教育するというのは、歴史教育なのか、それとも国語教育なのか。この問題に関連して柳田は一つの示唆を与えている。

「伝説を以て歴史と文学との混合体のやうに、考へることは無論正しくない。しかも片方の端が歴史と近くて時としては其境が紛らはしく、他の一方の端は文学に接して居て、しばし其中へ移り動かうとするまでは事実であつて、其両端の距離は世の中の開けて行くと共に、次第に遠く伸び

るといふこともほぼ確かである。」(三八頁)

伝説は歴史とも文学とも接触した独自の文化領域を形成している。その意味では、伝説教育という独立した学理的構成が求められるのかもしれない。しかし、現在の教育学ではそうした領域の研究は残念ながら未発達である。筆者は国語教育の立場から伝説教材を論じていくわけであるが、決して、伝説教材を、国語科だけの占有物として囲い込もうという意図はない。

国語教育の立場から伝説を扱うとすれば、それは、身近な旧跡を題材とした文学と捉えるのが適当である。文学教材の教育の一環として、伝説教育を位置づけることが可能であろう。

伝説は時とともに「変化成長」(八〇頁)するという見解は旧聞に属する。昭和八年版と昭和二十九年版との間、日本は、太平洋戦争、終戦、占領統治、講和といった、激動の時代を経た。その激動の時代は、伝説にどのような「変化」をもたらしたであろうか。その「変化」のあり様を説明するのが本稿の目的である。見方を反転するならば、飛騨の伝説という視点から、日本の戦後の一様相を明らかにする作業となる。

三 昭和二十九年版で削除された伝説

昭和八年版には六十四の伝説が掲載されている。昭和二十九年版には九十二の伝説が掲載されている。多量の増補がなされたことがわかる。しかしその一方、昭和八年版には掲載されていたものの、昭和二十九年版からは削除された伝説が五話存在する。その五話について吟味していくこととする。

第一は「時の鐘」(九一〇頁)である。高山城主金森可重が、民衆に時間の大切さを教えるために鐘を鳴らすようになった。しかしそれに民衆が慣れてくると、今度は大太鼓を打ち鳴らした。後に高山城が取り壊しになったときに、その鐘は元の所有者である千光寺に戻り、今でも保存されているという伝説である。

話の内容からは、特に削除されるような理由は見当たらない。あえて深

読みするのならば、時の鐘が、戦時下の空襲を連想させるからなのであるうか。

第二は「飯山の観音」(三四三三六頁)である。飛騨の国に流浪してきた三郎兵衛保重は、石浦の飯山にささやかな庵をしつらえて過ごしていた。ある夜、夢に観音様が出てくる。そして、西の山中の老松の下に救世観音尊像がある。それを安置して朝夕修念せよとお告げがある。実際探してみると霊像があった。お堂を作り霊像を安置した。その後、夢のお告げのとおり、次々と運が開けた。しかしその後、子孫保貞の時代に攻め滅ぼされ、保貞は自殺するのであった。

一族の栄枯盛衰を語った伝説である。最期に自殺するというのが、昭和戦後の時代に合わなかったのであろうか。あるいは、お告げの通りにしたのにもかかわらず、滅ぼされたことに矛盾を感じたからなのであるうか。

第三は「甘酒祭」(六五 六八頁)である。大名田町江名子の三宝荒神を奉った神社では、閏年の旧十一月十八日に大祭を行なう。その祭では多数の一般参詣者に甘酒と餅とを接待するので、「甘酒祭」と呼ばれるようになった。この荒神は女人が社地に入ることをはなはだ忌まれた。大祭の準備にも参詣にも一切婦女子のまじることを許さなかった。甘酒を受ける器さえ女人の手にかからないよう、女人の目にふれないように持ち出すことになっていた。

この祭礼の由来は定かではないが、同村に加藤源十郎という人がおり、農民に適当な雨具がないことを遺憾に思っていた。あるとき白髪の老翁が現れて、バンドリ(蓑の一種)の製法を授けた。その後、江名子はバンドリの産地になった。源十郎は境内に老翁の霊を合祀して、バンドリの製法が伝授された日に例祭を行い、甘酒を供することとなった。

この話の問題点は、女人禁制ということが強調されていることであろう。男女平等の戦後日本においては、こういった話は活字化しづらかったのかもしれない。

第四は「山人」(一一九 一二〇頁)である。飛騨の山中に身の丈七尺もある「おう人」という者がいた。山奥深くわけ入った猟師が、この「おう人」と遭遇した。逃げられないと観念した猟師は、昼飯に用意していた

握り飯を「おう人」に差し出した。その美味しさに喜んだ「おう人」は、猟師に猪やむじな等の山の獲物を与えた。それから毎日、猟師と「おう人」は、握り飯と獲物を交換した。獲物を沢山採ってくることを不思議に思った隣の猟師が密かに先回りしてみたところ、「おう人」を見つけ、猟銃で撃ってしまった。最初の猟師はこのことを聞いて、可愛そうなことをしたと、山深く入って「おう人」を探した。そして撃たれた「おう人」を他の「おう人」が介抱しているのを見つけた。しかし、撃つたのが自分だと誤解されるのを恐れて、逃げ帰ってきた。

誤解を恐れて逃げ帰ってきた猟師の行動について、あまりに自己保身的な点が嫌われたのであろうか。それ以外には削除の理由は思い当たらない。

第五は「人柱」(一六〇—一六四頁)である。水害によって堰は破壊され、困りはてた村の重役たちは、人柱を立てることを決意する。神の思召しによって、藤兵衛が選ばれた。それを聞いて十七歳の藤十郎という若者が、名主藤兵衛殿は村には不可欠な人材であるとして、藤兵衛に代わって自ら人柱に立つことを懇願する。最初は許さなかった藤兵衛も、その熱意におされ、藤十郎に人柱となることを許す。藤十郎の遺志をくんで、村人は堰の工事にあたり、難工事もほどなく成就の日をむかえた。それ以来、下荒城郷の村々は永遠に恵まれた土地になった。藤十郎の霊は氏神の森に合祀され、命日には今なお追善供養が行なわれている。

人柱を立てるという行為が、戦後の人権尊重の民主主義とは決して相容れない残酷さを有していると解されたことが削除の理由と考えられる。

以上、昭和二十九年版で削除された五つの伝説を見てきた。そこには、人間の清濁併せ持った本性を記録してきた伝説という口碑文化と、人間の心性のうちの善の面のみを扱おうとする戦後の学校教育文化との齟齬が浮かび上がってくる。ここに戦後の学校教育文化の特徴がいみじくも顕現している。「人柱」といった、人間の持つ負の性質を、戦後の学校教育文化では封印する傾向にあったといえよう。逆に、戦前の学校教育では、こうした人間の心のうちに潜む負の性質をも正視しようとする姿勢が比較的認められていたことがわかるのである。(そもそも、ある特定の性質を「負」と価値づけてしまふところに、戦後の学校教育の洗礼を受けた筆者の思い込

みが見て取れてしまふ。なにが「正」でなにが「負」かというのは、時代や文化によって異なるのである。)

四 内容の比較

昭和八年版と昭和二十九年版とは同じ伝説が数多く掲載されている。しかし細部の内容において違いを示す伝説も少なくない。それらの代表的なものを以下で考察していく。

四一 「串柿仙人」(七九頁、四二—四四頁)

仙人になりたいと願った男が、串柿だけを持って山に入ったが、仙人にはなれない。ついには山から転落して負傷したところを里人に助けられ、故郷に戻されるという話である。

主人公が昭和八年版では高山町川原町の作助となっているが、昭和二十九年版では高山の八軒町の源蔵に変わっている。

大きく異なる点は結末である。昭和八年版では、組の人々がお金を出し合って傷を治してやることで終わっている。しかし、昭和二十九年版では、「仙人になりそこなつた彼は僧となり西は九州から東北は奥州、函館までめぐり、数年後帰国し喚応是誰と呼び、町中を托鉢して歩いたり、松倉にこもつて仏像を彫刻したり、万人講に茶の接待所をつくつたりして、町の人々には是誰坊是誰坊と親しまれていた。松倉の観音堂には今でも彼の作の不動様、出山釈迦の像があり、墓は桐生の万人講にある。」(四三—四四頁)と加筆されている。

昭和八年版では、無能で役に立たない人物としてしか描かれていないのに対して、昭和二十九年版では、愚直な求道の結果、相当の敬意を払われる僧にまでなっている。

昭和八年版では「何とかして楽な暮らしの出来るやうに」(七頁)という思いから仙人になることを決意している。そして仙人になれば「わけなくお金持ちになれる」(七頁)と考えている。その一方、昭和二十九年版では、このような拜金主義的発想は消され、「わけなく幸福な身分になれる」

(四二頁)と書き換えられている。

最後に僧になることで、拜金主義の消去は決定づけられるのである。

四二 「彫刻師面平」(三六 三八頁、六五 六七頁)

今村面平という彫刻師の奇行を二話掲げている。第一の逸話は、釣りをする面平である。松本橋から釣針を投げ込んで、ごみを釣り上げて、籠に入れる。それを繰り返していたので、人々は何だろうと集まってくる。その人々に対して面平は、今日は人間を釣ってみようと思っていた。そしてあなた方を釣ったのです、と言って帰っていった。第二の逸話では、遊びに来ている子どもに豆腐を買いに行かせる。沸騰した湯が入っている鍋の上で面平は豆腐を思いつき握り締める。崩れた豆腐はそのまま鍋の中に落ちていく。面平は、包丁や切板を必要としないから、豆腐が好きだと独り言をいう。

昭和八年版では独り言を行って戸棚から溜の甕を出す場面が終わっている。それに対して昭和二十九年版では、近所の子供たちの歌が最後に加筆されている。「むーかいまーちの面平は、かんやのやーまへ鳥とり、とーりはとーれず日は暮れる、うーちへかへればかかはなし。(以下略)」（六七頁）という歌である。

本文においても、昭和八年版では言及されていないが、昭和二十九年版では、「一生妻を持たないという変り者であつた。」(六五頁)という文句が挿入されている。

昭和二十九年版では、独身であることに対して話者も「変り者」と判じ、近所の子供たちも「かかはなし」と嘲笑する。変り者として描かれている点は、昭和八年版も昭和二十九年版も同様である。しかし、妻帯せず独身であることが変り者だというようには、昭和八年版では描かれていない。

四三 「鍛冶橋」(四〇 四二頁、三三 三三頁)

大坂屋という富豪の家に泥棒が入り、百五十両が盗まれた。領主に訴えたところ、役人は近所一帯に足留めの命を下した。近所は難儀を強いられた。大坂屋は申し訳なく感じ、御吟味御免の儀を願い出た。それでも足留

めは解かれなかった。そうしているうちに大坂屋の南隣に住む男が縊死した。その男の家を捜索したところ、雪隠の踏み板の下から金子が出てきた。

ここまでは昭和八年版も昭和二十九年版も変わりはないのであるが、その後の話に多少の違いが生じる。昭和八年版では、金子は大坂屋に戻された。しかし大坂屋は、今回の件で近所の人々に迷惑をかけたので、この金子を何か公共のことに使い願いたいと申し出た。そこで、領主はそのお金を以って鍛冶橋を架けたことになっている。

一方、昭和二十九年版では、大坂屋が御吟味御免を願ったからという理由で、そのお金は召し上げられてしまった。そしてそのお金で鍛冶橋が架けられたことになっている。

昭和八年版が情を重んじた話になっているのに対して、昭和二十九年版は理を重んじた話になっている点が対照的である。

四四 「鉄漿蛇」(六一 六五頁、一一 一三頁)

弟の鍋山豊後守顕綱は、妬みから兄三木自綱の殺害を計画する。しかしその計画が発覚して、逆に兄の家来によって暗殺される。顕綱の奥方も同時に殺害されるが、そのとき帯を解き、その帯が大蛇と化すことを願いつつ谷に投げ込んだ。その後、奥方の帯が鉄漿蛇に化けて鍋山に棲みついたとされる。顕綱の子孫の平野清心という人の夢枕に奥方が立ち、自分は顕綱の妻女なれども白骨が久しく七夕岩の辺りに埋もれはてて成仏できないので、弔ってくれと告げる。白骨数片を見つけた清心は雲龍寺に石塔を立てて供養した。

以上は昭和八年版も昭和二十九年版も同様である。昭和二十九年版はこれでは話が終わっているのに対して、昭和八年版ではこの後、話が続く。

雲龍寺の和尚が不思議な夢を見る。自分たちの石塔を日々読経の聞こえる地に移してくれという夢である。連夜同じ夢を見るので、石塔を境内に移して法会を営んだ。数十年後お堂を修築するために石塔を移そうとしたところ、従事する者はみな卒倒し、大熱を発した。指揮した長老は死亡したので、人は恐れ驚き、石塔の上に地蔵尊を安置し、触れないようにした。

昭和八年版の後段の存在により、奥方の怨念の執拗さが強調される。そ

の怨念は、暗殺とは直接関わりのない、後の世の長老まで呪い殺してしまふ。こうした理不尽なまでの怨念が、本文削除というかたちで敬遠されたのであろうか。

四 五 「金鶏城址」(七二 七四頁、九六 九七頁)

丹生川の尾崎城主塩屋筑前守秋貞が戦乱で討ち死にする。奥方は秋貞の特に愛玩していた金鶏の床飾りを始め貴重な品々や軍用金を城の一角に埋め、娘もろとも自害する。後、元日の朝早くこの金鶏が東天紅と告げるようになり、その声を聞いた者は幸いを得るといふ伝説である。

昭和八年版も昭和二十九年版も、伝説のいくつかは、大人が子供と会話をすする中で語られる形式を取っている。この「金鶏城址」も、一学級の子供たちが先生に引率されて尾崎城址を見学に来たという設定である。先生が、この尾崎城址がなぜ金鶏城址と呼ばれるようになったかということの説明として、この伝説を語っている。興味深いのは最後の文言である。昭和二十九年版では、先生の「村の人々は金の鶏も勿論さがしたが誰もまだ掘りあてた者がないからまだ私達の今いるこの土の中にかくれているのだろつよ」(九七頁)という発言で終わっている。それに対して昭和八年版では、「長い先生のお話が終った。誰もく、「おれこそはその白つづの藪を見つけ、うまく宝にありつきたいものだ」と手に汗してじつと聞いてゐた。」(七四頁)という子供の心中吐露で終わっている。

ここでも昭和八年版では拝金主義が表現されている。それも子供の抱く願望として描かれている。こうした子供の現実的な俗欲は、昭和二十九年版では削除されている。

四 六 「村山天神」(一〇五 一〇七頁、一三九 一四二頁)

飛騨国司参議姉小路伊織は足利勢に滅ぼされた。北の方は代々家に伝わる薬師像と菅公像を家臣に背負わせて逃げ延びた。農家にかくまわれたが、長居も危つくなつたので、両像を残して旅に出た。村人は小社を建てて両像を安置した。その後、いつの頃か盗賊が両像を盗み出す。逃亡中、菅公像だけ忽ち重くなつた。盗賊は菅公像を藪の中に捨て去る。ある夜、村山

の市蔵という農夫の夢枕に菅公が立つて、自分の所在を知らせる。市蔵が行つてみるとはたして菅公像はそのとおりに放置されていた。村人と相談して、小社を建てて祀つた。

ここままで昭和八年版の村山天神の伝説は終わっている。それに対して、昭和二十九年版では続きがある。

ある夏の日、村の子供たちが天神の森で遊んでいた。神像を取り出して、宮川に持つていき、川の水で洗いつつ、神像を川に浮かべて遊んでいた。それを知つた大人は急いで止めさせ、子供たちは名主から大目玉をくらつた。その夜、御神霊が名主の枕元に立ち、「今日は心の清い子供たちと楽しく過ごしていたのに、お前が邪魔をしたのは残念だつた」とのお告げをなされた。

この昭和二十九年版からは、伝説を子供たちの生活と結びつけることで、教材として親しみを持たせようという意図が読み取れる。しかし文学形象の観点から見ると、後段は取つて付けた感を否めない。

四 七 「杣が池」(一六四 一六八頁、四六 四九頁)

御岳の麓日和田という村に原助という豪家があり、そこに器量もよく、氣立ても優しく、仕事もよくする「おちん」という女中がいた。おちんを嫁にほしいという者は数え切れなかつたが、おちんはみんな断つた。しかし、日和田の伐採に来ていた小三郎が申し込むと、おちんはすぐに承諾した。ある日小三郎は弁当箱に生きた岩魚が二匹入っているのに気づき、塩焼きにして食べた。すると喉の渇きが止まらなくなり、大量に水を飲むうちに蛇体となつてしまった。その日、小三郎の家にいたおちんもどこかへ姿を隠してしまった。

母は信じられず、大蛇のいる池に行つた。昭和二十九年版では、母の前では大蛇は再び小三郎の姿になり、母の帰宅を嘆願する。その後母がどうしたかは描かれていない。それに対して昭和八年版では、大蛇のまま母と対面する。そして大蛇が池に隠れると同時に、母は池の中に飛び込んでしまふ。

小三郎にとつて、この変事は災難である。その上に母までが息子の後を

追うということは悲劇の色を濃くする。昭和二十九年版では、直接関係のない母の命を奪うまでには描かれていない。しかし、そのために悲劇性は薄らぐこととなる。

五 まとめ

昭和八年に日本は国際連盟から脱退し、世界的に孤立の道を進み、世情も暗くなりがちだと思われていた。しかし、昭和八年版を読む限りでは、決してそのような暗さは浸透していない。拜金主義を諷刺し、妻帯しないこともそれほど後ろめたくは捉えられておらず、人々は情にも厚かった。総じて、昭和八年版に描かれた民衆は、闊達で潔い。それに対して昭和二十九年版に描かれた民衆は、比較的理を重んじ、死との距離感が相対的に遠くなった。僅かな差ではあるが、死が身近なものとして描かれなくなってきた傾向が認められる。

こういった微妙な価値観の相違が、戦後の学校教育倫理にも、影響を与えたものと思われる。

【引用・参考文献】

- 高山西小学校研究部編（一九三三）『飛騨の伝説と民謡』非買品。
 高山市立西小学校研究部編（一九五四）『飛騨の伝説』平田書店。
 柳田國男（一九四二）『日本の伝説』三國書房。
 柳田國男（一九四〇）『伝説』岩波書店。

【謝辞】

高山市立西小学校の沿革について、高山市教育研究所からご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

本研究は、平成十六年度岐阜大学活性化経費（研究）（萌芽研究）「飛騨の国語教育史」の補助を得たものである。